

北区役所公式 Instagram ▶ @okayama_city_kita_ward



時を超える 鼓神社

つづみ じんじや

備中国二宮鼓神社は北区上高田に位置し、備中国の中で、一宮である吉備津神社に次いで格式の高い神社です。創建年代は定かではありませんが、927年に書かれた、延喜式神名帳（朝廷から認められた神社の登録リスト）に名前を連ねており、1000年を超える歴史があると伝えられています。

鼓神社には5柱の神様が祭られています。主神である高田姫命は、温羅討伐に貢献した豪族、楽々森彦命の娘であり、吉備津彦命の後です。彼らはそれぞれ、桃太郎伝説のサル（楽々森彦）、桃太郎（吉備津彦）のモデルになっています。どの神様も吉備国平定に関わる神様であることから、神社の歴史の深さを知ることができます。

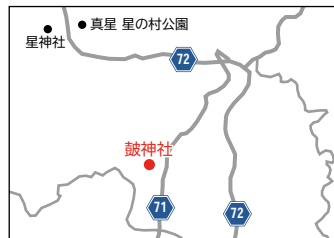
敷地内には、南北朝時代に建てられた県下最大の大きさを誇る石造の「鼓神社宝塔」があり、国の重要文化財に指定されています。また、江戸時代に足守藩主の木下氏から贈られたものと伝わる鳥居と神池は、木下氏が足守を離れた際に鼓神社に向かって帰りたいと

願い続け、その願いが叶って再び足守に戻ってくることができた時に、お礼として贈ったものと伝わっています。

ぜひ鼓神社に訪れて、吉備国の時代から現代までの時代の流れを感じてみてください。



▲▼木下氏が贈ったと伝わる鳥居と神池



●問い合わせ先

北区役所総務・地域振興課 ☎086-803-1656

中区役所公式 Instagram ▶ @okayama.nakaku.official



私たちの生活を守り続ける「百間川河口水門」

旭川の放水路である百間川河口部分には巨大な水門があります。児島湾と百間川を隔てるこの水門は、洪水調整・潮止め対策・高潮対策の3つの役割を果たしており、元禄時代の築造後から修繕と改築を繰り返しながら、私たちの生活を守り続けています。

現在は、西側に位置する「昭和水門」と東側に位置する「平成水門」の2つがあり、河口部分が全て水門で守られている光景は迫力があります。

流下能力の不足を解消するために昭和43年に完成した「昭和水門」は、幅20mのゲートが6基並んでいます。

旭川から百間川への分流量増加により平成27年に増築された「平成水門」は、ゲートを回転して開閉する「ライジングセクターゲート」が採用されています。幅33.4m、高さ約6.9m



▲百間川河口水門

のゲートが3基並んでおり、この形式のゲートとしては国内最大級の規模を誇ります。

また、中央にある防潮堤広場からは、両方の水門を間近に見ることができます。建設の歴史を記した看板や、昭和の改修前までに使用された石造の水門も復元展示されており、時代や環境の変化とともに進化してきた水門の歴史を感じることができます。ぜひ一度訪れてみてください。



▲平成水門



●問い合わせ先

中区役所総務・地域振興課 ☎086-901-1602



万富東大寺瓦窯跡 来年1月東大寺サミット開催

岡山市東部に広がる瀬戸町は、古代から中世へと続く歴史ロマンを今に伝えるまちです。その象徴が万富東大寺瓦窯跡です。源平の争乱で焼失した奈良の東大寺を再建するための瓦を焼成した瓦窯跡です。国家的プロジェクトを支えるため、この地が選ばれ、焼成された瓦は吉井川を使い、遠く奈良へと運ばれ

ました。発掘調査では窯の構造や焼成技術の高さが確認され、当時の技術力の高さがうかがえます。

現在は、万富東大寺瓦窯跡保存会や住民グループが史跡の草刈りやガイド、学習支援などを行い、地域の誇りとして次世代へ伝える活動を続けています。

市では、デザインマンホールの増設やVR動画の制作、令和9年1月24日(日)には、東大寺の造営や再建等で歴史的に関係の深い自治体が集う「東大寺サミット」の開催などが予定されています。

引き続き、瓦窯跡の価値や魅力を広く発信するとともに、より一層、地域の活動を支援し、地域資源を未来へとつなぐ取り組みを進めます。古代と現代が交差するこの地に、ぜひ足を運んでみてください。



▲デザインマンホール（万富東大寺瓦窯跡周辺（東区瀬戸町万富）6か所に設置）

●問い合わせ先
瀬戸支所 ☎086-952-1111



興除に住む人々の暮らしを支えた「川舟」

江戸時代末期から明治時代初期にかけて農業用地として干拓された興除地区には、碁盤の目のように用水路が張り巡らされ、その脇にはリヤカーがやっと通れるほどの細い農道が続いていました。重い荷物の運搬に苦勞した人々が考え出したのが、水路を利用した「川舟」です。

川舟は米・麦・い草などの収穫物、肥料、木材、石材、農道補修用の山土、飲料水などさまざまな荷物を運びました。隣村に行くにしても境には必ず河川、溝渠、^{かた}瀉などがあり、渡船や川舟を活用することになります。時には花嫁が嫁入りの際に乗り、新しい家へ向かったといいます。舟は丈夫さが求められ、宮崎県産の杉板が特に重宝されました。動かす際は舟先の水竿に結んだ綱を人が引き、荷が重いときは後方から竿で押して進めました。また、6月～9月の用水期には水路の流れを確保するため藻刈り作業が行われ、長さ5～6mの青竹を2本組み合わせる手法が用いられました。

昭和30年代に自動車が普及すると川舟の役目は終わりましたが、市の中でも古くから水運陸運ともに重要視されてきた興除地区の交通の発達や暮らしを支えた歴史的な存在として、当時の姿のまま保存されています。



▲現存している川舟

※駐車場はありません

●問い合わせ先
興除地域センター ☎086-298-3131